

一 次の1～3の問いに答えなさい。

- 次の――のひらがなを漢字に直しなさい。送りがなが必要なものはそれも書きなさい。
- ① かいちようなスタートを切る。
 - ② 今は自分の勉強にせんねんしたい。
 - ③ 新しい雑誌がそうかんされた。
 - ④ 畑に農薬をさんぶする。
 - ⑤ 出品された中では彼の作品があつかんだった。
 - ⑥ 節約して経費をへらす。
 - ⑦ おさない弟の面倒をみる。
 - ⑧ 王様がたぐさんの家来をしたがえる。
 - ⑨ 車はまがりくねった山道を進んでいく。
 - ⑩ 彼が生徒会長をつとめることになった。

2 次の①～⑤の文の□に入る言葉と同じ言葉が()内に入る例文を、あとのア～カの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ① この案に君が賛同してくれたら、提案した私の顔も□というものだ。
- ② 費用を支払う際、予算から足が□このないようになりたい。
- ③ 今日の健太くんの当を□発言にはすっかり感心させられた。
- ④ 見事に志望校に合格した太郎君は肩で風を□ように歩いている。
- ⑤ 一部の若者の、電車の中での乱暴なふるまいは目に□としかいいようがない。

ア 「――」杭は打たれる」と言うから、今日の会議は発言を控えておこう。
 イ 足もとから鳥が()ように準備しはじめた。
 ウ 会議でまず口を()役目をまかされた。
 エ 一晩で準備をするというのは、どうみてもわたしの手に()。
 オ 秀吉は()鳥を落とす勢いで天下統一をはたしていった。
 カ 結局、間をとりもった国が漁夫の利を()。

3 次の①～⑤の俳句と同じ季節(春・夏・秋・冬・新年)を表す語句を、あとのア～オの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。
 (作品は現代かなづかいに改めています。)

- ① 朝顔に釣瓶とられてもらい水
- ② 菜の花や月は東に日は西に
- ③ つく羽を犬が啜えて参りけり

千代女
与謝無村
小林一茶

- ④ 遠山に日の当りたる枯野かな
- ⑤ 目には青葉山ほととぎすはつ松魚

高浜虚子
山口素堂

*はつ松魚……初鰯のこと。

ア 葉桜 イ 小春日和

ウ うぐいす

エ 門松

オ 残暑

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

英語圏の学校の教科書は、とにかく厚い。

中身を見てみると、覚える本ではない。日本だったら、教科書があって、ほかに、参考書と問題集と資料集と読み物ア……イというぐあい
 に何冊分もが、一冊になっている。充実している。読むと楽しい。先生がいなくても、授業を受けなくても、その科目が理解できる仕組みに
 なっている。

値段も高そうだ。教科書は学校が買って、一年間、生徒に貸すものなのですね。終わったら学校に返し、何人も使う。表紙の裏に、その教
 科書を使った歴代の生徒の名前が書いてある。何年も使えば、一年あたりの費用は少なくてすむ。

歴史の教科書の場合は、こんな感じだ。
 古文書が載っている。設問がついている。これは、誰が書いたのでしょうか。これは、何の目的で書いたのでしょうか。何行目に「死刑にする」
 ウとあるのは、なぜ死刑になるのですか。手がかりになる資料もついている。考えていくエと、自分で答えが出せるようになっていく。歴史だ
 けれど、決して暗記科目じゃないんです。

② 歴史は、そうやって、現在とは違った、過去の出来事を理解することなのだ、という態度が貫かれている。

教科書はふだん、学校のロッカーに入れてあって、宿題をするときだけ、家に持って帰る。重いから、何冊も持って帰るわけにはいかない。
 宿題も、そんなに沢山、出ないんです。中国の学校は、小学生のうちから、山のように宿題が出て、夜中の一二時まで宿題をやっている。宿
 題を出さないオと、親が学校に文句を言うんです。もっと宿題を出してください。これは中国の、昔からの伝統ですね。それに対して、英語圏
 の学校は、生徒が必死に勉強することを求めている。ノーマルなティーンエイジャーですよ、なんの心配がありますか、という態度です。
 さて、では、それぞれの教科、学問を学ぶことに、どんな意味があるのか。どれも、生きていく折衝に、ちゃんと役に立つ。それをわかって
 いれば、学びにもいっそう身が入るうというものです。

まず、文学。

文学はどう役に立つかというと、人間についてのリテラシーが高まる。こういう人間、いるよね、という理解力が高まる。

この社会にはいろいろな人間がいるんですけど、その実生活と、文学は違う。実生活は、人間と出会って深く相手を知るには、コストがかかるから、身近な人間のことを知っているだけ。その範囲はきわめて小さい。それ以外の人間のことは、実際に知るわけにはいかない。出会いたくても出会えない人びとが、いっぱいいる。

いまは、テレビやメディアが発達しているから、身近でない人びとについて知っているような気がするけれど、実生活で出会っているわけではない。私たちはテレビに出てくる人びとについて知っているけれど、テレビに出てくる人びとが私たちのことを知っているわけではない。双方向のコミュニケーションではない。実生活は、双方向のコミュニケーションの場で、それを深めるのは大変なことです。だから、よく理解しているひとの数はごくわずかだ。

③ 文学には、どんな人間でも登場する。

もっと大事な違いは、相手を内側からみることができること。

実生活では、相手がなにを考え、どんな感情を抱いているかは、相手が表現した言葉やふるまいを通して、理解し類推するしかないわけです。大事なことを黙っているかもしれないし、感情を隠しているかもしれない。相手を誤解しているかもしれない。いちばん大事な他者であっても、ぼんやりヴェールをかぶったような、薄暗がりのなかにいるようにしかわからないのです。④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

⑤ 経験は個別的だから、またつぎに役立つかどうかもわからない。

文学は、言葉を使った、トリックなのです。著者が考えた、架空の実社会。

複数の人間が、出てきます。その複数の人間の内側が、手に取るようにわかる。特権的な語り手がいて、「そのとき、Aさんは、こう考えていました」みたいに、説明する。怒っていました、悲しんでいました、喜んでいました……。つぎに、Bさんが出てきて、Aさんに対してこう行動し、こう言いました、と書いてある。Bさんの内面についても、説明があります。Aさんの内面と、Bさんの内面の、両方を見渡すことができる。

この視点は、だれの視点なのか。Aさんでも、Bさんでもない。⑥ ⑦ ⑧ ⑨

小説は、中立な語り手の視点から語られる場合（三人称小説）もある。でも、どちらも、⑦ ⑧ ⑨ 複数の人びとを見通す視点になっているところは、同様です。小説の視点は、自由に移動して、複数の人びとの内面に立ち入り、その社会を俯瞰する。手に取るように、その人びとの感情や行動を追体験できる。それが小説の、特徴です。これは、実生活ではありえないことである。

古代にも中世にも、物語があります。特別な登場人物が、⑧ ⑨ 数奇な運命をたどり、読者はわくわく、はらはらします。もとは神話にさかのぼる、伝承であり芸能です。その物語の骨格を残しながら、作中の人物の内面に入りこんで、複数の人びとのあいだの心理のドラマを描きだす。そういう深度をもつものを、小説とよぶことができます。近代の文芸作品の、代表的なカタチです。

だから、⑧ ⑨ 小説は、実生活のただのコピーではありません。実生活に素材を持っているんだけど、実生活を深めて、実生活以上のものにしていくんですね。

物語はもともと、実生活をはみ出て、想像力をはばたかせるものだった。小説は、そのかたちを借りつつ、この社会を生きる人びとと重なる世界を描く。そして、人びとの内面に入り込む。近代になって、そうした文学が發展しました。人間の精神世界が独りに閉じこもらないで、ほかの人びとと共存する中で豊かに育てられる、という意味です。

これは、実生活に役立つ、擬似体験でもあるし、実生活ではえられない、真実の体験でもある。そういう二重性があります。

たとえば、恋愛小説の本をたくさん読んで、恋愛のリテラシーが高まって、出会いを実現できました、というひとがいてもいい。現実はそのなかに充実していないけど、文学の世界ではほんとうの恋愛を知りました、と満足して一生を過ごすひとがいてもいい。

というふうに、文学そのものが、人びとの役に立っている。読者としては、こういう作品を書いてくれて、また違った人生の切り口をみせてくれてありがとう、ですね。

⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(橋爪大三郎『正しい本の読み方』 ※本文を改めた部分があります。)

問一 ①「身が入ろう」・②「数奇な」の二つの意味として、最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

③「身が入ろう」

- ア 真剣になるだろう イ 効果が出るだろう ウ 意味を見出せるだろう
エ 望みがもてるだろう オ 親しみがもてるだろう

④「数奇な」

- ア とても奇妙な イ 数多くの ウ 華やかな エ 波乱に満ちた オ 面白おかしい

問二 「なんの心配がありますか、という態度です」の「と」と同じ用いられ方をしている「と」を、これより前の本文中の「と」の中から二つ選んで、記号で答えなさい。

問三 ①「英語圏の学校の教科書は、とにかく『厚い』とありますが、なぜですか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 中身を覚えるためではなく、先生がいなくて授業が受けられないときに、生徒たちが楽しく読めるように作っているから。
イ 学校が教科書を買う費用が少なくすむように、参考書や問題集や資料集などを一冊にまとめて教科書にしているから。
ウ 教科書を何冊も持って帰らなくてすむように一冊にすることで、生徒たちが一生懸命に宿題に取り組めるように工夫しているから。
エ 何代にもわたって生徒が教科書を使うので、どのような生徒にも対応することができるよう内容に充実させているから。
オ 暗記するためではなく、生徒たちが自分の力で考えて理解するために参考にしてできるよう内容を、一冊の中にたくさん載せているから。

問四 ②「歴史は」を含む一文の中で、「歴史は」という語を受けている部分は、どこですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア そうやって イ 現在とは違った ウ 過去の出来事を エ 理解することなのだ オ 態度が貫かれている

問五 ③「文学には、どんな人間でも登場する」とありますが、筆者はここでどういうことが言いたいのですか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 実生活では常にいろいろな人間と関わらなければならないが、文学の世界では、作品に登場するたくさんの人物の中から自分と深く関わる人間を自分で選ぶことができるということ。

イ 実生活では他の人をよく知るは大変であり、限られた人びとしか関わり合えないが、文学作品を読めば、その中に登場するさまざまな人物とたやすく出会うことができるということ。

ウ 実生活では身近にいるわずかな人間としか出会えないため、その経験は生きていく上で役に立たないが、文学作品には多くの人物が登場するので、人間についての理解力を高められるということ。

エ 実生活では他の人をよく理解するために双方のコミュニケーションを深めるのは難しいことだが、文学作品を読めば多くの登場人物と出会うことができ、双方のコミュニケーションを深めやすいということ。

オ 実生活ではテレビやメディアの発達によって多くの人びとと出会うことができるが、文学の世界には登場人物の数に限りがないので、実生活よりもさらに多くの人物と出会うことができるということ。

問六 ④「そういう特徴」とありますが、これは実生活でのどのような特徴を言っていますか。説明しなさい。

問七 ⑤「経験は個別的だから、またつぎに役立つかどうかもわからない」とは、どういうことですか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 実生活での経験は一つ一つが異なり、つぎに同じ経験をするとは限らないので、今後に生かせるかどうかもわからないということ。

イ 実生活での経験は恋愛やけんかなど実にさまざまなので、その中につきに役に立つ経験があるかどうかもわからないということ。

ウ 実生活での経験は数が限られており、そのような少ない経験から学んだところで、意味があるかどうかもわからないということ。

エ 実生活での経験は自分だけに限りのあるものが多いため、他の人にも役立つような経験があるかどうかもわからないということ。

オ 実生活での経験はだれでもするようないふれたものが多く、そこから得たことをつぎに生かせるかどうかもわからないということ。

問八 ⑥「そういう視点」・⑦「複数の人びとを見通す視点」とありますが、ここで述べられている「物語」や「小説」の特徴の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 物語や小説には、複数の人間についていていねいに描かれているから、自分が作品の中の人物になりきることによって、実生活では味わえない想像の世界を自由に味わうことができる。

イ 物語や小説には、複数の人びとの感情や行動が書かれており、それらを読んで自分のことのように体験すれば、実生活でも複数の人間の内側が手に取るようにわかるようになる。

ウ 物語や小説には、特権的な語り手が存在し、複数の登場人物の行動や内面について説明するので、実生活と文学の世界との違いにだんだんと気がつくことができる。

エ 物語や小説には、実生活では立ち入ることがためられる複数の人間の内側についてくわしく説明が書かれており、身近ではない人びとの内面にさえも遠慮なく立ち入ることができる。

オ 物語や小説には、実生活では直接知ることのできない自分以外の人びとの内面が書かれているので、作品中の複数の登場人物の気持ちや行動についてはっきりと理解することができる。

問九 ⑧「小説は、実生活のただのコピーではありません」とありますが、どうしてそのように言えるのですか。説明しなさい。

問十 ⑨「これが文学の世界です」とありますが、筆者の言う「文学」についての説明として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 文学によって私たちは、本当のことを包み隠さずに話す人たちと出会い、実生活とは違った真実の体験をすることができる。

イ 文学によって私たちは、実生活と似た体験をすることで、現実において失敗することなく、満足して一生を過ごすことができる。

ウ 文学によって私たちは、実生活以上の体験をすることで、独りの世界に閉じこもらないで積極的に人生を送ることができる。

エ 文学によって私たちは、実生活では出会えない人たちと出会う中で内面を成長させ、豊かに生きていくことができる。

オ 文学によって私たちは、違った人生の切り口を知り、実生活では味わえない理想的な素晴らしい人生を楽しむことができる。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

両親が離婚した時、母はわたし（鈴）を残し、弟の圭だけを連れて家を出ていった。わたしは母を恋しく思う一方で、どうして自分を置いてしまったのか、母は何を考えていたのだろうと時々思うことがあった。しかし、ほとんど連絡をとることもないまま四年が経過し、二か月前に母は病気で急死する。四十九日の法要がすんだ後、もうすぐ小学校三年生になる圭は、中学一年生になるわたしと父のもとで暮らすことになる。父やわたしとうちとけられず、なかなか生活になじめない圭の気持ちを感ずったわたしは、一緒に福山の母方の祖母の家に行くことにした。

四年まえに福山にもどってからは、お母さんは圭をつれて何度もこの家に来たはずだった。わたしは部屋の中を見まわした。でも、どこにもお母さんの残した印のようなものは見つからなかった。

「おばあちゃん」とわたしは言った。

「なあに」

「八百屋のお仕事って大変なの？」

「大変じゃないわよ。もう二十年近く塚本で働いてきたんだから。塚本の仕事があってよかったって、このごろ思うの。おじいちゃんがあんな

に早くに死んじゃうなんて思わなかったから。①仕事があつて助かるってことがあるんだって。それに、このたびも」と、そこでおばあちゃんは言葉を切った。

おばあちゃんはスベアリブをかじりはじめた。おばあちゃんの髪はお葬式(くわい)のときには栗色(くりいろ)だったのに、いまは頭の上のほうは白髪(しろがみ)になっている。白髪を染めるのをやめたのだろうか。

「おばあちゃんはどこにも悪いところは無いんでしよう。元気なんだよね」

「元気？」と、おばあちゃんは初めてきく言葉のようにくり返した。眉毛(まゆ)をあげて「まあ、そういう言い方になるかもね。どんな言い方でもいいの。やらなきゃなんないことをやってるだけ」と言った。

圭はわたしとおばあちゃんの会話には入ってこないで、まずドライカレーを食べ終え、つぎにスベアリブにとりかかっていた。圭は噛みついた肉を骨から引きはがそうとしていた。

「わたしはね、小さいときに父親が死んだの。それから小さかった弟が死んで、そのあと母親も死んで、夫に死なれ、娘(むすめ)に死なれ、そんな人生よ」
いつかテレビで見たゴルフ場の芝生(しば)が頭に浮かんだ。手入れされた緑の芝生がどこまでも広がっていて、遠くに縁取りのように林が見えて、芝生のほかに見えているのは空だけで、人影もなかった。

「それって、もしかしたら砂漠(さばく)みたいな感じ？」と、わたしは頭の中に浮かんだ景色とは反対のことを言った。言ってしまったから、自分がひどいことを言ったことに気がついた。

「そう、砂漠よ」

おばあちゃんは小さく笑った。「あのね、おじいちゃんの癖(くせ)ってね、話をしている『そうなんだよ、そのとおりなんだよ』って言いながら、こう、ぼん、と手を打ったの。あれがおじいちゃんだったな、と思ひだすの。いろんなことは忘れちゃったけど、②それだけ覚えてりやいなって思ってる」

圭は三本目のスベアリブを食べ終えようとしていた。

わたしはおばあちゃんの後ろに見えている流し台のステンレスの水切りかごに目をやった。皿が二枚立っている。グラスが一個ふせてある。水切りかごのプラスチックのポケットには二本の木のスプーン。

「どう言ったらいいのかしら。あのね、悲しみが行きすぎると、半分うそになったりもするからね」とおばあちゃんは言った。「わたしはあんまり悲しくないようにしているの。悲しくなりそうになると、お水を飲むことにしてるの。そしたら、胸につまりかけていたものが取れるから」

おばあちゃんはかすかに笑った。

「おばあちゃん、いま何歳(なんさい)だっけ？」

「ほっと声をたてて、『まだ六十四歳』とおばあちゃんは言った。

③徳島におじさんもおばさんもあるし、翔太くんや美空ちゃんもいるからね」

「そうよ。夏休みにはまた、みんなで来るって」

「ごちそうさま」と圭が言った。ペーパータオルで手をふいて、それから口もぬぐった。「テレビ、見るよ」と圭は席を立った。

「体に気をつけてね」と、わたしはおばあちゃんに言った。

「はい、ありがとう」

「お茶碗(ちawan)はわたしが洗うね」

「だめだめ。お客さんだから、鈴ちゃんと圭ちゃんは。テレビを見て」

おばあちゃんがテーブルをかたづけはじめたので、わたしはテレビのある畳(たたみ)の部屋に移った。

テレビはついていたらけど、その前に圭はいなかった。

圭は隣の暗い部屋にいた。こちらに背をむけてかきこまってるすわり、手元の何かをのぞきこんでいた。

そつと近づいていくと、圭は二つ折りの携帯電話を開いてその画面をのぞいていた。そこにはお母さんが写っていた。缶(かん)コーヒ―を持った手を上にあげて笑っている。

わたしは圭のそばにすわった。

「これ、お母さんの携帯電話」と、圭は小さい声で言った。「まだ、あるよ」

圭は指でボタンを操作して、べつの画像を出した。

お母さんが*野元さんと肩を組んで笑っている。べつの写真は圭の後ろ姿。それから桜の下でサンドイッチを食べている圭。つぎの写真は、お母さんが缶ビールを片手に黄色いスカートをつわつと広げてすわっている。

圭はつぎつぎに写真を開いてみせた。

草むらにしゃがんでいる圭と猫。神社の前でむかいあっているお母さんと猫。二匹(ふたひき)の猫。家の中でのお母さんはテーブルにひじをついている。その前には読みかけの本があった。

急に涙(なみだ)が出てきたけれど、圭に気づかれなくて、わたしは指で鼻をつまみ、息を止めた。

④「わかったでしよ。ぼくとお母さんはいっしょだったんだよ」と、画面を見たま圭は言った。ひっそりとした声だった。

圭は待ち受け画面にもどすと電源をオフにした。そして携帯電話のコードをコンセントから抜き、立ちあがって算(たん)算(さん)の引き出しに入れた。そこに携帯電話はしまわれていたらしかった。

わたしは圭のそばを離れた。台所からは水の音がきこえていた。

トイレに入ってドアをしめた。

わたしはトイレトペーパーで涙をふいた。圭は福山に帰ってくるたびに、算(たん)算(さん)にしまわれているお母さんの携帯電話を取りだして、お母さんの写真を見ていたのだ。

弟は、と思った。自分の気持ちをだれにも話せなくて、話す言葉が見つからなくて、そうしろと言われたから、わたしたちと暮らし、友だちもほとんどいない学校に通っているのだ。弟は毎日、しなきゃいけないと決められていることをしていたのだ。圭にはここしか逃げこむ場所がなかったのかもしれない。でも、ここも、圭にとってはちょっとだけいる場所にはなっても、ずっといられる場所じゃない。どこにもいられない

くて、だから圭は自転車で走りまわっているのだろうか。地図に印をつけながら、どこかに自分が安心していられる場所をさがしていたんだろ
うか。

わたしは使っていないトイレの水を流して外に出た。

おばあちゃんは、わたしのと圭のと、ふとんをならべていてくれた。

圭はリュックから漫画本を二冊取り出し、「読むけど、いい？」ときいた。

いいよ、とわたしは言った。「新しい漫画を買えばいいのに」

⑤ 圭が家から持ってきた二冊はかなり傷んでいる。

「この本にあきたら買うから」と、
仰向あふむかいて圭は言った。

「まだあきていないの？」

「だって、気づいていないところが見つかるもん」

「お母さんて、本を読むのが好きだったよね。どんな本を読んでいたか知ってる？」

「わからないよ」

「そうか。じゃあもう寝るね」

「うん」

わたしは目を閉じた。

おばあちゃんが見ているテレビの音がきこえていた。

⑥ 起きて、簞笥の引き出しからお母さんの携帯電話を取り出して、もう一度見てみたいと思った。でも、そんなことはできなかった。圭がくすつと笑った。圭がすごい速さでページを繰る音がきこえる。何十回も読んでいる漫画なのだから、話の筋は完全に頭に入っているのだろう。こういう場面があって、そのつぎに変なやつが出てきて、会話があって、そのつぎのページが山で、笑える、というふうに、ぜんぶわかってる筋をたどっていくのは安心して物語に浸^{ひた}っていけるのかもしれない。

圭はばさつと漫画を枕元に置いた。あつという間に一冊読み終えたのだ。つぎの一冊を手に取り、表紙をめくる音がする。

目がさめると、部屋は暗かった。隣の部屋もしずまっていた。おばあちゃんも眠ったのだ。圭の寝息がきこえる。

家は夜にすっぽりと包まれていた。

目をあげていると、闇が戸の隙間からじわじわとにじむように部屋に入りこんでいるような気がした。何の音もしなかった。闇が音も飲みこんでしまったような気がした。

目が冴えてきた。

野元さんがお母さんについて話したことは、わたしの知らないことだった。そうだったのか、お母さんて、そういう人だったのか、とおもうとすると、^⑦ 暗いところに足を突っこむみたいな気持ちになった。お母さんは、わたしの知らない長い長い時間を生きて、だれにも話さなかった。たたくさんのことを胸にしまったまま亡くなったんだということが、すうっと体に染みるようにわかった。

わたしはまばたきをした。空中に何かなにかが漂っているような気がした。

部屋の大きさが寝るまえよりも広がっているような気がした。部屋の一部が溶けてあいまいになっているような気がしたけれど、そっちには目をむけないようにした。隣の部屋で寝ているのが、おばあちゃんではなくてお母さんだったらしいのに、と思った。

部屋は少し広がり、それから少しちぢんだ。部屋がぐるぐると動きだすような予感がした。いまに大きい音がして、がたんと大ゆれするよう
な気がした。自分がばらになつてしまふそつだつた。

わたしは、はっは、と息をした。

はっは、はっは。はあはあ。はあはあは。

わたしは両手で肌ぶどんをぎゅっとつかみ、目をかたく閉じた。息を止めた。がまんできなくなるまで息を止めて、それから吐きだした。脈の音がわくわくときこえた。

わたしは目を開いた。

それから寝ている圭を見た。圭は上向いて寝ていた。くちびるを少しあけて、規則正しい呼吸をしていた。

お母さんが亡くなったあと、この家で暮らしていた圭に、わたしは一度も電話をしなかった。それまでも電話で圭と話したことはなかったから、気軽に電話できなかった、というのもあるけれど、わたしは、圭はどこか高い木の上に登っている気がしていた。おーい、と下から呼んでも声が届かないくらいに高い木のでっぺんにいて、どこか遠くの空のほうを見ているような気がしていた。下にいるわたしには気づかずに、雲をながめているような気がしていた。わたしのそばでもなく、お母さんのそばでもない場所に圭はいて、わたしからは見えないものを見ているような、そんな気がしていた。

体の上をすうっと冷たい空気が流れた。

わたしは肌ぶどんをはねのけ、ふとんの上に起きあがつた。それから立ちあがつて、ガラス戸のカーテンをそとあげた。ガラス戸も音をたてないようにあげた。足音をしのばせて縁側に出て、サンダルをはいて庭におりた。

外の空気は乾いてひんやりしていた。闇夜ではなかった。星が見えていた。月も出ている。小さな庭に植えられた木や草花の葉が白く光っていた。空気が透きとおっていた。わたしは深く息を吸った。雲がゆっくりと動いていくのがわかった。首を大きく動かして空全体を見渡した。

空はどこまでもどこまでも果てしなく広がっていた。宇宙の暗闇が広がっているんだと思った。遠い時間がどこまでもつながっている。

〔注〕 * 野元さん……お母さんの高校時代の同級生。

（岩瀬成子『地図を広げて』 ※本文を改めた部分があります。）

問一 ①「仕事があつて助かるってことがあるんだって。それに、このたびも」とありますが、「仕事があつて助かるってことがある」とはどういうことですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 仕事を持つていることで、つらいことがあつても自分自身は元気で健康な生活を送ることができるということ。
イ 家計になうおじいちゃんは亡くなったが、仕事があるのでそれほど経済的には困ることがないということ。
ウ 二十年近く仕事をしてきたので、家族が亡くなっても生活の大きな変化はなく気持ちの上で楽だということ。
エ やらなければならぬ仕事をする事によって、家族を失った悲しみをまぎらわせることができるということ。
オ 仕事に出かけるためにいつも身だしなみに気をつかうので、突然の不幸でもあわてることがないということ。

問二 ②「それだけ覚えてりやいいなって思ってる」とありますが、おばあちゃんが「それだけ覚えてりやいいなって思」うのはなぜですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア いかにもおじいちゃんらしい言葉やしぐさだけを覚えていれば、それ以外のことは忘れても許されると思ったから。
イ おじいちゃんが亡くなってからずいぶん時間が経ったので、おじいちゃんに対する愛情がうすれてしまっているから。
ウ おじいちゃんらしい癖だけを記憶していれば、おじいちゃんをいろいろ思い出して悲しみすぎることがないから。
エ 死んだ人のことをあれこれ思い出して悲しむ姿が、まわりにわざとらしく見えてしまうかもしれないから。
オ おじいちゃんとの楽しい思い出を覚えていただけで、家族を次々と失った悲しみが自然となぐさめられるから。

問三 ③「徳島におじいさんもおばさんもあるし、翔太くんや美空ちゃんもいるからね」とありますが、わたしはおばあちゃんにどういうことを伝えたいのですか。説明しなさい。

問四 ④「『わかったでしよ。ばくとお母さんはいっしょだったんだよ』と、画面を見たまま圭は言った」とありますが、この言葉から、わたしはどういうことに気づきましたか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア お母さんとの思い出にひたることである悩みの解決されて、圭が幸せな時間を過ごしていたということ。
イ お母さんと一緒にいたことを思い出して、圭がさまざまな悲しみを何とかやりすごしていたということ。
ウ 圭は写真でお母さんを出していたので、圭に友だちができていないことをわたしは心配する必要があるということ。
エ 皆にないしよでお母さんの写真を見ていたことをわたしに知られてしまい、圭が恥ずかしくなっているということ。
オ お母さんと一緒に過ごした楽しい思い出が圭と比べて少ないことで、わたしが圭に同情されているということ。

問五 ⑤「圭が家から持ってきた二冊はかなり傷んでいる」とありますが、圭にとつてのその二冊の本はどのようなものであるとわたしは考えていますか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 思い出がたくさん詰まった二冊の漫画は、圭がお母さんと二人で過ごした日々を思い出す手がかりになっている。
イ 何度読んでも発見があるので、わくわくしながら二冊の漫画を読んでいる間はお母さんを失った悲しみから逃れられる。
ウ 話の展開がわかっている二冊の漫画を読むことは、学校にも家庭にも居場所がない圭の心のよりどころとなっている。
エ 二冊の漫画を深く読み込んで熱中することで、圭は本が好きだったお母さんと自分とが似ていることを再確認できる。
オ 筋がわかりきっている二冊の漫画を読むことで、日々の生活の中で感じている不満をこれ以上つらせないでいられる。

問六 ⑥「起きて、算算の引き出しからお母さんの携帯電話を取り出して、もう一度見てみたいと思った。でも、そんなことはできなかった」とありますが、「そんなことはできなかった」のはなぜですか。説明しなさい。

問七 ⑦「暗いところに足を突っこむみたいな気持ちになった」とありますが、わたしはどんな気持ちになったのですか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア わたしがお母さんの知らなかった面を知ること、かえってお母さんの本当の姿がつかめず不安になった。
イ お母さんはつらいことをだれにも話さないで亡くなってしまったことを知って、かわいそうだと思った。
ウ わたしが知るお母さんは本来のお母さんではないということを感じ知らされて、心の底からがっかりした。
エ もっとわたしがお母さんのことを理解してあげればよかったのにと、深く後悔して申し訳なく思った。
オ お母さんのことを身近に感じることでできたものの、知らなくてよいことを知ってしまったと悲しくなった。

問八 ⑧「わたしは、圭はどこか高い木の上に登っている気がしていた」とありますが、わたしはこの時の圭をどう感じていましたか。説明しなさい。

問九 ⑨「空はどこまでもどこまでも果てなく広がっていた。宇宙の暗闇が広がっているんだと思った。遠い時間がどこまでもつながつている」とありますが、この時わたしはどんなことを感じていますか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。
ア 空間と時間の果てしない広がりに比べて、その中で生きている人間はほんの一瞬にしか存在しないものだと思い、孤独でちっぽけなものだと感じている。
イ 空全体を見渡していると、亡くなったお母さんもこの空のどこかにいて、いつもわたしのそばにいて温かく見守ってくれているのではないかと感じている。
ウ 宇宙の暗闇が自分の未来までずっと続いていて、わたしのまわりにはこれからも次々と思いがけないできごとが繰り返されるのではないかと感じている。
エ 遠い時間の流れる暗闇の中で月や星が輝いているように、今まで悲しいことのあった自分には明るい未来が待っているのではないかと感じている。

オ 人は悲しみを抱えながらも確かに生きていて、それぞれがばらばらなように見えるが、みんな宇宙と時間という大きなものの中に存在していると感じている。

